



春爛漫



最新のサクラ開花予想（3月14日）では、甲府の開花日は26日、満開日は4月4日となっています。このたよりが届く頃には、神金でもサクラが開花していることと思います。

同時に、モモやスモモの花も咲き出し、春たけなわとなり、神金の一番美しい季節になってきます。神部神社・金井加里神社・浜松神明社の例大祭が予定されていますが、花粉採取の花摘みの最盛期になるかもしれません。果樹園作業もいよいよ忙しくなる季節の到来ですね。

◇花のまちづくり◇

「花のまちづくり推進事業」補助金を活用し、パンジーやビオラをプランターに植え公民館玄関前や駐車場に並べました。一足先に春がやってきたように見えます。



子ども囲碁教室開催中

5日・15日に開催している「神金囲碁の会」に児童クラブの子どもたちも参加し、子ども囲碁教室が行われています



[illegible]

長年の懸案事項であった上水道の整備が進み始めました。



主 催：大菩薩の風展実行委員会 ■後 援：甲州市／甲州市教育委員会／山梨日日新聞社／山梨放送
■事務局：ナチュラルカフェ TEL:0553-34-8334 / E-mail: natural_cafe_kosho@yahoo.co.jp

– 2 –

神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

神金村と東京市との行政訴訟について 一

旧神金村は東京都から毎年多額の交付金を受けている。寄付金として平成四年度では金五百六万円であったが、物価の変動によって年毎に変わるが、少なくなることはない。この寄付金は神金財産区管理会が窓口になり神金地域のために有効に活用され、大変喜ばれている。他の地域にはこのような例は殆どないことである。

極めて珍しいこの寄付金の由来について時折尋ねられるが、このことについて関わりのあった人も少なくなり、真相全体を正確に把握することは困難である。しかし、幸いなことに神金村当時の「行政訴訟関係綴」が市役所にあり、当時の新聞記事や多くの先輩から聞いた話や、筆者が見聞きした知る限りについて披露するので、参考になれば幸いである。又、この神金地区にのみ特権が残されているのはどういう訳だと他の地区から強いやっかみがあったのも事実である。

それは、町村が合併したのであるから旧村の財産は当然塩山市に吸収継承されるべきであるとの理屈もあったが、そこは合併の条件である。

昭和二十九年、町村合併促進法で時の政府は全国の町村合併を図った。塩山町は周辺五ヶ村の吸収合併を考え、奥野田・玉宮・大藤村はこれに応じたが、神金村と松里村は渋っていた。特に、神金村は東京都からの寄付金や萩原山保護組合等の特権があるので合併には消極的であった。このことに業をにやした塩山町長池田東太郎氏の英断にて、旧村の借金は塩山市で受け入れ、権益は旧村に残して宜しいということで決着がつき、合併が成立したのである。従ってこの寄付金等は神金村と塩山町で取り交わした合併の条件によるものであって、終世変わるものではない。

さて、東京市との行政裁判であるが、この事件が始まったのは昭和三年頃表面に出たのである。この頃は世界的不況で、経済界は不振で銀行等も経営悪化のため合併が行われ、当地方も蚕糸業の不振で繭値は暴落し、更に桑園の凍霜害が続く農家は税金も出せない状態であり、村の財政は税収入の落ち込みで極端に悪かった。

*次ページに続く

神金の歴史

社会的には思想が混乱し、小作争議・労働争議の発生に伴い共産主義を礼讃する青年が増加した。政府は遂に全国に特別高等警察課を新設して、思想の取り締まりにあたった。これが終戦の年まで続いた鬼より怖い特高警察である。

神金村も財政的に貧困で貧弱町村の格付けでは県内の上位であった。

この頃は小学校の教員の給料は村で出していたのだが、財政困難のために一度には支払えず二度に分けたり月後れになることもあったそうである。昭和八年八月二十五日の山梨日日新聞の記事に「神金村の本年度の予算総額は金二万七千八百八十七円であるが、このうち教育費に一万一千七百八十六円が当てられている。児童数六百七十二名あり二つの分校を持ち前島吉保校長以下十名の職員は、交通の不便を克服し涙ぐましい努力をしている」とある。

当時の村長は廣瀬和吉氏（上萩原上切）であったが、村会議員・役場職員・村内有識者交々この貧困状態から脱出することを考えていた。たまたま神金村地籍内の山林に対し一町歩につき一円の村税「特別税反別割」を賦課することを考えついた。この主たる目的は、明治四十四年山梨県が水源涵養林として東京市に売却した柳沢峠より東の神金村内五千六百余町歩賦課することであった。もしこの山林に金壹円を賦課し徴収することを得れば金五千六百円余の増収となり、当時一ヶ年の予算総額が貳万拾貳円であったので一躍貧弱町村から脱皮できると、この名案に手をたたいて喜んだ。直ちに村会を召集してこの案を提案したところ満場一致で議決した。

ところが、この議決を知った村内山林所有者から絶対反対の声が起こったが、村内の山林は三百町歩足らずであり、東京市から「特別税反別割」を徴収できれば村内山林所有者には損をさせないようにするからと宥めて収まった。

早速、昭和四年度から東京市に対して「特別税反別割」を賦課したところ直ちに異議申し立てがあった。理由として、この山林は東京市民の水道水源地で涵養林で公共のためのものであり、税務署からも免租の認定を受けた公用地であるため、税金を賦課することは不当であると拒絶してきた。これに対し、神金村では直ちに急集村会を召集し、担当職員である廣瀬好恵氏（村長和吉氏の次男：上萩原上切）を原告行政訴訟代理人として行政裁判所に提訴した。